《CEL SERIES》

大阪再発見 Vol.2

written by Tomoyo Kurimoto 栗本 智代

第12回

地域に根付く上方落語

～手作りの「寄席」をめぐる～

田辺寄席

千朝落語を聴く会（太融寺）

天五劇場

駅寄席 すてんしょ亭

「落語？ けっこう好きですよ」という年上の友人が何人かいる。中学生時代からラジオでよく聞いていたとか、親が集めていたカセットテープを借りて聞いたとか。「へえ・・・」と感心してしまった。こちらは、たまたまテレビで見聞きしたことがある他、飛行機の中の番組で何度か耳にした程度。現在の仕事についてからは、研究の題材として上方落語に興味を持ちはじめたが、文献ばかり見ていた。偶然、上方芸能のお祭りのような場で、生で聞いたこともあるが、ベテランの有名落語家であったのに、なぜかあまり面白くなかった記憶がある。

ところが、前回の「大阪再発見」で、野田を探索した時に訪れた“ やまがそば ”での「そばと落語の会」の楽しかったことといったら（感動したのは、そばの美味しさだけではなかった）。寄席の底知れぬ魅力を垣間見た気がした。そのような、大劇場ではない地域密着型の寄席が大阪には数多くある。高座に上がる人、裏方として準備する人、お客さん、それぞれの場を創る人により、また違った味わいがあるに違いないと思い、あちこちへ寄席をめぐることにした。

田辺寄席

～大阪最古の地域寄席は、笑いと拍手の連続だった～

「田辺寄席」会場入口

「田辺寄席」は、阿倍野区にある市立阿倍野青年センターで開かれている。今年、三十周年を迎える、大阪ではもっとも古い地域寄席である。

日曜日の昼間、筆者が足を運んだ日はあいにくの天気であったが、雨足が強まる中でも、客席はどんどん埋まっていき、満席に。どうやら、地元だけでなく、京都や神戸からわざわざやって来る常連さんも多いようだ。

はじまる前から、場内の雰囲気がなんともあたたかい。受付で、当日発行版の田辺寄席ニュース「寄合酒」が渡される。その日の出し物について、楽しい解説やクイズが盛りだくさんで、それを読んでいると待ち時間もすぐに過ぎてしまう。

最初に、**桂文太**さんがご挨拶。この寄席が立ち上がった時から、出演者側のお世話や取りまとめを続けてこられ、毎回高座に上がっておられるので、田辺寄席の顔にもなっている。「面白かったら、遠慮なく笑ってください。面白くなくても…笑ってくださいね！」(客席、笑)と、お客さんと既に打ち解けている感じだ。最初からこんな空気だから、あとは一番目の若い噺家さんから、どっと笑いが起こって、場内はますます熱気を帯びていった。

当初から出演者のコーディネイトをされている 桂 文太さん

この寄席が産声をあげたのは、昭和四十九年の九月。気楽に立ち寄れる寄席をつくろう、と、地元田辺界隈に住む落語好きの自営業者や会社員たちが集まり、若手噺家グループを紹介してもらって実現した。最初は、パン屋の三階で旗揚げしたが、だんだん常連客も増えてきて入りきらなくなり、現在の場所へ会場を移したという。

この寄席を支えているのは、世話人の方々だ。会場の設営、B5版の月刊会報「寄合酒」の作成と配布、チケット販売など、すべて手弁当だそうだ。中入りには、ぜんざいを振る舞う。世話人の数は現在十五人くらいで、これまでのべ約百人が関わってきたという。阪神大震災以後は、神戸での出前寄席や炊き出しにも取り組んでいる。

立ち上げ当初からずっと世話人として関わってこられた**大久保敏**さんは、「お客さまは、ここを大切にしてくれている。毎回たくさんカンパしてくれる方もいらっしゃいます。すべて手作りですが、やりたくてやっているから、全く苦労ではありません」。木戸銭は、スタート時は三百五十円で、一九八四年からずっと前売四百円で通していた。「少しでも安くして、多くの方に気軽にきてほしい」という世話人会の思いもあるが、他の寄席とのバランスや出演者への謝礼などを考えた結果、二〇〇四年から前売りを七百円に値上げすることが決まった。それでも安い。

上方の落語家の九割以上がこの寄席の舞台を踏んでいる。落語家さんの出番を決めたり、当初は舞台設営なども手伝っていた桂文太さんは、「田辺寄席は、道しるべのような存在。出発点でもあるし、迷ったらどっちへ行ったらいいか教えてもらえる。他ではできない噺もできるし、大きな舞台の前にここで実験的にやる時も。また、若い人とのやりとりも楽しい」。お囃子のお手伝いに来ていた若い落語家さんは、学生の時、田辺寄席のお客さんとして文太さんの噺を聞いていたの

熱気に溢れる会場

毎回発行される田辺寄席ニュース
「寄合酒」

だという。「お互いの成長を確かめられるのも長く続いている会だからこそ」。会場も受付も楽屋裏まで笑顔があふれ、このひと時をそれぞれの立場の方がみな楽しんでいるのが、手にとるようにわかった。

天五劇場

～商店街らしい、バラエティに富んだ庶民的な寄席～

北区の天神橋筋商店街の中の天神橋筋五丁目にある、「天五会館」は、天神橋筋の一本東の細い通りに面した、小さな三階建ての木造の建物。そこを会場にした寄席が「**天五劇場**」である。一階で木戸銭を払うと、お茶の缶がサービスでもらえる。靴を脱いで階段を上がると二階がお座敷になっている。「天五劇場」という看板、高座や紅白幕などの手作り感が、年期の入ったランマや畳とともにぬくもりを感じさせる。

プログラムがバラエティに富んでいる。落語だけでなく、漫談や腹話術など盛りだくさんで、初心者でも気楽に聞ける。落語でも、ろれつが廻らない若手落語家には、客席からあたたかいつっこみが入るし、客席参加型の新作落語では、会場全員でこぶしを挙げて叫ぶという場面も。最後は豪華賞品が当たる大抽選会。小さな子供連れもウエルカムでアットホームな雰囲気であった。

「天五劇場」案内チラシ

恒例となった豪華賞品が当たる抽選会

天五会館に落語会が開催されたのは、一九九六年のことだ。居酒屋「**天満酒蔵**」主人の岡正夫さんが天五商店会会長になった時、商店街活性化の一環として、落語会「天五倶楽部」を立ち上げた。もともとお店には、吉本興業を中心とした落語家や漫才師などが、常連客として通っており、大の落語好きの岡さんは、彼らの勉強会の場を設け、活動を応援したいと考えた。たまたま同時期に、商店会青年部により、与力町で閉鎖になった桂米二さんの勉強会を引き継ぐ形で「天五寄席」がスタート。当初は天五寄席の方が、以前のお客さんもあって来場者が多かったが、バラエティやサービス面で、天五倶楽部の人気が高まり逆転した。天五寄席はなくなり、天五倶楽部もスタートして五年後に一度見直しを図ったが、岡さんのもとに有志が集まり「天五劇場」として再スタートを切ったという。

居酒屋「天満酒蔵」

仕掛け人の岡さんにお話をうかがうと、告知の横断幕をアーケードにつったり、会場の設営や当日の手伝いなど、準備が大変そうである。木戸銭は、全て出演者へ渡し、さらに毎回の打ち上げの料理は、自前で用意する。お客様へのお茶缶サービスも、抽選会の豪華賞品もすべて、岡さんの懐から提供されている。岡さん自身「儲けることは考えない。寄席などは損して当たり前。特にこの寄席は自分の道楽と思ってはじめました。自腹を切らせるものは何かって？ そりゃあ男気ですよ。まさにタニマチです。ただありがたいことに、寄席の帰りに毎回十人位お店を利用していただいているので、全くの出費ばかりでもないのですが」。

岡 正夫さん／「天五劇場」前にて

毎回、内容をプロデュースされているのは、天五倶楽部の時から今日までほぼ毎回出演しているという**桂三風**さん。「ここでは、庶民的な笑いを目指したい。落語ファンは通になるほど、普通と少しずれた所に笑いを求める傾向もあるけれど、ここでは入門編。劇場のようにいろんなものが出てくるという意味で、落語だけにこだわらない演芸全般をプログラムしています」。

桂 三風さん

天神橋筋商店街ならではの、上方の演芸文化発信気質が根付いているようだ。

太融寺寄席

～地域に開かれたお寺での落語会～

太融寺

大阪キタにある**太融寺**（正式には、高野山真言宗準別格本山太融寺）は、弘仁十二年（八二一年）に弘法大師が嵯峨天皇の勅願により創建した。新西国三十三か所霊場第二番、近畿三十六不動尊霊場第六番、おおさか十三仏霊場第八番、なにわ七幸、三十三か寺観音参り札所一番他、霊場めぐりのお寺として有名である。が、一方で、落語会のあるお寺としても、知名度が高い（寄席に興味がなかった頃の筆者でもなんとなく知っていた）。

もともと、本坊の一階・二階を大学の落語研究会に提供していたことから、落語家の若手の勉強会としても使われるようになった。定期的な会合は七一年にスタートしており、まだ桂小米といっていた故桂枝雀さんが「小米の会」を行ってからだという。その後、桂一門を中心として、上方落語の勉強会がいくつも開かれた。例えば、「小米の会」では桂南光や雀三郎（当時は、"べかこ"と"米治"であった）、桂吉朝、歌之助などがよく定期的に高座に上っていた。現在では、米朝一門を中心に、桂千朝、雀松、米二、文我などが、自分の会を持っている。

麻生弘道 住職

太融寺の**麻生弘道**住職は、「お寺はもともと、人々の心の拠り所として出発した。地域文化を育む場所として利用していただきたい」というお考えである。当初は大学のブラスバンドや若い人の宿泊にも提供していたが、周辺への音の問題などで淘汰されて畳の上での落語会、という一番しっくりくるものが継続されたという。

「残念に思うのは、大阪には上方文化があまり育っていないこと。大阪を代表する文楽でも、地元で小中学生の頃から興味をもつよう教育すべきでしょう。近松門左衛門のお墓でもほとんど知られていない。もっと郷土愛を持たなくては！そういう意味で上方文化の復興を応援したい。また、お寺に笑いは大切な要素です」。実際、高座の台や屏風など、特別に発注してつくらせて、保管もしているという。

桂 千朝さん

定例会をもつ**桂千朝**さんは、「ここは本当に気楽にできます。太鼓も屏風もかついでこなくてもいいわけですし、至れり尽くせりです」。やはり落語の会場が少ない中で、お寺ではなかなか貸してくれるところがなかったという。現在は二階の大広間を使っているが、たまに、お葬式などが入ると一階で休息されている親族の方に気をつかいながら、二階で笑ってもらうこともあったという。「やはり、若い頃は場数が大切なので、勉強になります。ここは持ちネタを固めていく場所、自分の下地づくりができます。はじめてのネタも長い間やっていなかったネタも含め、自分の芸を再確認する場です」。二階の百畳の大広間をお客さんで一杯にできたら卒業、という考え方もあるようだが、千朝さんはずっとここで続けていきたいそうだ。

この日の「**千朝落語を聴く会**」は、忘年会の前の時期のせいか手品もあったが、古典を丁寧に演じる実直な噺家の姿勢に、非常に好感が持てた（やはり、勉強会の場合、明らかに、気が抜けていたり、雑にこなしていると感じさせる若手もいるからだ）。お寺という装置がそうさせるのかもしれないが、やはり場所だけでも、ひと味もふた味も違うものだ。

お馴染み客らしき年配の夫婦や男性のほかにも、遅れて入ってきた人にはサラリーマン風の背広姿や若い女性が目立った。仕事帰りにちょっと落語、終わったら数分も歩けば飲み屋が並ぶ繁華街。アフター5の贅沢なフルコースとして楽しむお客さんも多そうだ。

「千朝落語を聴く会」パンフレット

千朝落語を聴く会

TORII寄席

～法善寺の顔として～

千日前にあるトリイホールは、音楽、舞踏、コント、パフォーマンスなど地域密着型の文化発信基地になっている。ここで、毎月一日に「TORII寄席」と題した上方落語の勉強会が開催されている。お世話役は桂小米朝さん。うかがった日には、「桂歌之助追善落語会」というテーマで、人間国宝の桂米朝さんも出られるという豪華なプログラムであった。

このホールがあるKAMIGATAビルが出来たのは平成三年春のこと。それまでは、「上方」という和風旅館だった。明治の中ごろから、お茶屋と映画館を兼ねて営業しており、戦後も旅館として、松竹関係の重役の方や役者・芸人などが通っていたという。

旅館「上方」／玄関
(「浪華の夢のあとさき」上方藤四郎著より)

現オーナーの鳥居学さんは「父親が上方藤四郎のペンネームで川柳やエッセイを書いていて、旅館を営む母とともに懇意にしていただいた落語家さんも多かった。父が亡くなり、時流に抗えず、旅館をたたんでビルにしようと考えた時、せめてビルの一部をホールにして、上方のにおいを残したらどうか、という話になりました。桂米朝さん、古今亭志ん朝さん、吉村雄輝さん、もず唄平さんなどが協力してくださり、現在のトリイホールが産声を上げたのです」。

鳥居 学さん

「TORII寄席」はこの時、若手落語家を育てる勉強会としてスタートし、当初は二ヶ月に一回の開催であった。鳥居さんは「特に最初は出し物も決まらないし、やればやるほど赤字で苦しかった。でも認知度を高めて通っていただくためにも、三年目から一ヶ月に一回にしました。赤字は他の事業でまかなうようにして、鳥居がひと肌脱いだところ、落語家さんも"気"で来てくださいました」。そうまでして続ける理由について、「法善寺には、昔二つの寄席があったが、今はパチンコやピンクサロンが増えてしまった。まちは、そこに根をはった企業が支えていかなくては。芸能のまちとしての顔でありたい。テレビ社会の今こそ、生のよさをわかってほしい」。

定着するまで十年かかったという。しかし最近では、記念会などで、桂春団治さんや今回の桂米朝さん、他のジャンルから有名俳優などが来てくれることもあるという。小米朝さんも「しんどい面もあるけれど、前身の旅館からの人のつながり、伝統を大切に、続けています」と、鳥居さんとともに、毎回毎回、寄席ができたことを喜ばれている。今後は、「TORII講談席」も開催する計画だときく。さらに本格的な上方文化の発信が期待できそうだ。

「TORII寄席」と案内チラシ

なにわばなし かみなり亭

～店から拡がる"笑い"の可能性～

地下鉄の谷町六丁目駅からすぐの薬業年金会館のお座敷で、「なにわばなしかみなり亭」は開催されている。

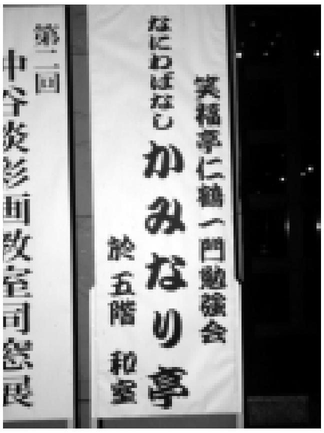
もともと、空堀商店街にある「かみなり亭」という居酒屋で昭和六十三年にスタートした。ここのご主人である植康幸さんの同級生が、笑福亭松鶴さんや仁鶴さんと仲良しで、一門の弟子の勉強会をしようという話になり、店の奥のお座敷を利用することにした。三十人入れば一杯になる小さな畳の間が会場とすれば、楽屋は厨房で、若手落語家は店のお客さんの間を通って、高座に上がった。「最

植 康幸さん

初は、七人しか集まりそうになかったから走り回って宣伝して子供も入れてやっと二十人くらいになりました」と植さん。しかし、どんなに狭くても、音は三味線・太鼓の生演奏にこだわり、落語家さんの芸が間近で楽しめるという魅力、そして笑福亭仁智さんがレギュラーで出られ、新作のネタおろしをされることにより、お客さんはだんだん増え、一年もしないうちに超満員状態になってしまった。そこで、一年後には、薬業年金会館の館長さんの好意で、百人は収容できる現在の会場に移して継続しているという。

この寄席によく出ている仁福さんは「お客さんも、私たち落語家の性格やキャラクターをよく理解してくださっていて、非常にやりやすいです。細かいチェックもされますね。終わった後、必ず、かみなり亭で打ち上げをしますが、その時、お客さんも一緒に入っての飲み会になって、ほめられたり注意されたりします。もちろん新しいお客さんもいますが、大劇場でできないことがここでは挑戦できます」。

笑福亭 仁福さん



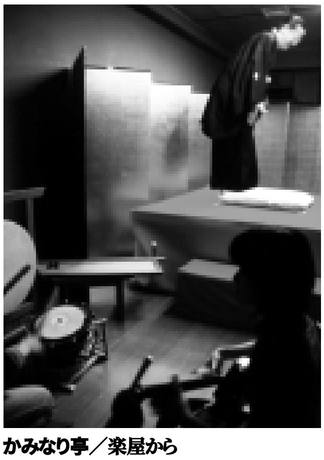
かみなり亭／看板

実はこの「かみなり亭」自体が、“笑い”“笑談”をテーマにした、植さんのキャラクターを生かした店づくりをしている。植さんの漫談はプロ級で、テレビにも数度出演されたほど。「大将としゃべっているうちに、元気になれる」と落ち込んだ時に通ってくる人もいるという。駄洒落を考えてからお店にやってくるお客さんも少なくないようで、遠方から来る人が八割近いという。

かみなり亭店内は、落語家さんの色紙でいっぱい

穴場的な魅力のあるこのお店から、異ジャンルの上方文化の新たなコラボレーションも生まれている。観世流の森本哲郎さんと笑福亭仁智さんとがお店で出会ったことから、山本能楽堂という能舞台で、能と落語の会が開催されたり、さらに落語と狂言、落語と吹奏楽という取り合わせでの催し企画も実現し、好評を得たという。

とにかく、人を笑わせることが大好きな植さん。落語会も赤字でも気にせず、楽しんで続けていきたいと話す。人と人、芸と芸、人と笑顔の仲人である店長の心意気とそのオーラが満ちているお店から、落語という芸能も育まれ、関わる人すべてが元気づけられているような気がした。



かみなり亭／楽屋から

ごかいらく落語会と新世紀落語会

～新作のお披露目会はキタのどまんなかで～

「今日はようこそお運びくださいました」と最初に高座で挨拶されているのは、落語作家の小佐田定雄さんとくまざわあかねさん。会場は、キタの旧関西テレビのデジタルエイトビル地下一階スペース「TEAM火の車稽古場」。秘密倶楽部のような雰囲気さえ感じられる。ここでお二人書き下ろしの新作落語が披露される「ごかいらく落語会」が、二〇〇一年五月にスタートし、一年に四回開催されてきた。当初から十回で終わる計画で、二〇〇三年十一月で十回目、最終回を迎えた。

幕開けに高座で挨拶する、
小佐田定雄さん（右）とくまざわあかねさん（左）

最終回の出演者は、同会レギュラーの桂九雀さん、再登場コールの多かった桂雀松さん、講談師の旭堂南海さん、そしてゲストは在阪某局の人気アナウンサー。華があり、満席のお客さんも得をした気分だっただろう。

仕掛け人は、石原基久さんと山下

桂 九雀さん

淳一さん。お二人はそれぞれ、この落語会をはじめる前にも、太融寺や扇町ミュージアムスクエア、東梅田教会などで落語会のお世話をしてきた。関東へ転勤し東京でも落語会を開いていた山下さんが、やはり大阪で落語会をする方が気楽でいいと考えていたところ、小佐田定雄さんが、ご自分と弟子のくまざわあかねさんの作品の新たなネタおろしの発表会をやりたいと提案されたので、この落語会が生まれたという。「らくごかい」をシャッフルしようと、文字を並べ替えて「ごかいらく」となった。

石原基久さんと 山下淳一さん

場所は、キタで、安く新しいスペースを求めて、現在の場所が決まった。行列のできる落語会にしたい、との思い通り、開場三十分前からお客さんが並んで待っており、ほとんど毎回立ち見が出るほどの盛況ぶりである。落語ファンでもないのにこの落語会だけは来るお客様もいるそうだ。

現在上演される古典落語は、過去に数多あった作品の中から残った質の高いものに限られる。しかし新作落語は、まだ歴史も浅く、傑作もあれば駄作もある。それは、落語家さんが上演してみないとわからない部分があり、この落語会での上演が最初で最後となる作品も少なくない。落語作家や落語家にとって、またお客さんにとってもそのプロセスを味わえる貴重な機会が「ごかいらく落語会」である。今後はしばらく休んで、くまざわあかねさんが充電された後、また再開するらしい。

この会場のオーナーである遠藤宏一郎さんは、ホールを貸している立場ではあるが、落語会を応援する意味で、場所を安く提供して、多くの方に来ていただけるよう協力されている。この遠藤さんは、もうひとつの新作落語会である、HEPHALLで開催される「新世紀落語会」の実行委員会メンバーでもある。こちらの落語会は、落語作家の新作だけでなく自作のものも含め、ある程度こなれた新作ネタを披露するという会だ。遠藤さん曰く、「ごかいらく落語会は、場所性とネタおろしの意味で〝ケ〟だが、新世紀落語会は、おしゃれなビルで、〝ハレ〟の場。新作落語の甲子園のようになってほしい」。

「ごかいらく落語会」最終回チラシ

遠藤宏一郎さん

HEPHALLはまさに、ショッピングや観覧車を楽しみに来た若者がふらりと立ち寄れるシチュエーション。内容も、現代的なものが多く、はじめての人でもすぐ場になじめそうだ。こんな場があれば、若い落語家さんも新作に取り組む一つの目標ができる。

大阪ならではの新作落語が、今後どのように生まれ育つか、楽しみである。

「新世紀落語会」の模様（HEPHALL）

駅寄席〝すてんしょ亭〟

～仕事帰りに気楽にふらりと立ち寄れる、これが本来の寄席～

昨年の秋、大阪駅で寄席がはじまった。その名も「駅寄席〝すてんしょ亭〟」。場所はJR大阪駅T・iS大阪支店内の一画である。第一弾として、二〇〇三年九月二十四日から十月十七日のウィークデイ、夜七時五十分から八時三十分に行われ、あまりに好評なため、第二弾として再開。十二月八日から十九日のウィークデイの夜八時十五分から九時にも開催された。

JR西日本の大阪支社では、歴史と文化に彩られた大阪の現代の魅力を発掘し発信しようと、「おおさか街あそびキャンペーン」を展開しているが、その一環として、落語を、駅という日常的な場で提供することで気軽に楽しんでもらおうと、この駅寄席が企画された。主催は、おおさか街あそびキャンペーン推進協議会（西日本旅客鉄道株式会社、財団法人大阪観光コンベンション協会）、落語作家のくまざわあかねさんの企画監修で、気鋭の若手

「駅寄席」ポスター（チラシ）

落語家が二名ずつ日替わりで出演するという、はじめての試みである。入場料は三百円。落語家さんにとっても交通費程度の謝礼で、ほとんどが手弁当での参加だという。

筆者が立ち寄った日は、桂都んぼさんと桂歌々志さんの二席。旅行代理店の中に囲いを設けた小さな空間だが、開演前に、駅構内でJRの社員さんが駅寄席のチラシを撒いて勧誘すると、予定の五十席はみるまに満席になった。サラリーマン風の男性や若い女性同士の姿が目立つ。時々ガタンガタンと電車の発着の音が響くがそれも愛嬌で、いざ生演奏のお囃子で落語家さんが高座に上り熱弁を振るうと、客席からはくすくす笑いや拍手が。

桂 都んぼさん

終演後に、落語家さんに「ラジオ聞いてるでぇ」と握手を求める年配のおじさんや「頑張ってね」と気軽に話し掛けるご婦人の姿が印象的だった。

桂都んぼさんは「ほとんどのお客さんが生の落語をはじめて聞く方ばかりです。落語の固定ファンではなく新しいファンを開拓できるかどうかが試されているようで、非常に刺激的です」。「こちらも、若手ばかりなので、お客様も、育ててあげようというあたたかい目で見てくださっているように感じます」。一席一席真剣に取り組まれている。その証拠に、客席の雰囲気をみてから演題を決めており、この日は男性客が多かったので酔っ払いの噺にしたという。実際一杯飲んでから来ているグループもいて、好評であった。

駅寄席“ すてんしょ亭 ”の模様

本来、寄席というのは、常設小屋でいつでもやっていて、気ままにふらりと立ち寄れるものであったが、今の関西には、残念ながら落語の定席がない。駅寄席は、期間限定ではあるが、駅構内で安く短時間で行われるため、会社帰りや食事の後に、ちょっと寄り道程度の気分で楽しめる。まさに寄席の原点を目指したこの取り組みを、ぜひ続けてほしい。

◆　◆

ここで紹介できなかった寄席もたくさんあるが、いずれも、「場」をプロデュースする人や落語家さんが、上方落語という文化を育て広げるため、ほとんど手弁当で支えているのが地域寄席である。その心意気が伝わって、独特のぬくもりのある空気が生まれ、お客さんを幸せな気分にするのだろう。

改めて、生で落語を聴くと、なにわ言葉の響きの上品さに気づかされ、また昔の大阪の暮らしや街並みを活き活きと思い描くことができる。まさに貴重なにわの語りべが笑いとともに継承されており、落語という文化が地域に根付いていると感じた。

もっと気楽に上方落語を味わえる機会や「場」が拡がれば、大阪がもっと楽しい街になるだろう。ぜひ応援していきたい。CEL

（大阪ガス エネルギー・文化研究所 研究員）

今回紹介した地域寄席インフォメーション

●田辺寄席（大阪市立阿倍野青年センター）
【問い合わせ】
田辺寄席世話人会事務局／
06-6706-3872（大久保書店内）

●天五劇場（天五会館）
【問い合わせ】
06-6351-9406

●太融寺「千朝落語を聴く会」
【問い合わせ】
米朝事務所／06-6365-8281

●TORII寄席（TORII HALL）
【問い合わせ】
06-6211-2506

●なにわばなし かみなり亭（薬業年金会館 和室）
【問い合わせ】
かみなり亭／06-6768-3549

●ごかいらく落語会（TEAM火の車稽古場）
【問い合わせ】
FALL／06-6628-0513

●新世紀落語会（HEP HALL）
【問い合わせ】
新世紀落語の会事務局／06-6362-6510